

博士論文概要

論文題目

建築家アントニ・ガウディ・イ・クルネットの建築論
的言説における思想的系譜に関する研究
Philosophical Genealogy of Antoni Gaudí i
Cornet's Architectural Theory

申請者

山村	健
Takeshi	YAMAMURA

建築学専攻 建築意匠論研究

2011 年 12 月

アントニ・ガウディ・イ・クルネット (Antoni Gaudí i Cornet, 1852-1926) は、19世紀末から 20 世紀初頭の四半世紀にかけてスペイン、カタルーニャで活躍した建築家である。代表作には、カサ・ミラやサグラダ・ファミリア贖罪聖堂が挙げられる。本研究はこの建築家の建築論的言説の位置づけをカタルーニャの諸思想の中に位置づけることを目的としている。

これまで、ガウディに関しては J・F・ラフルスを先鞭として、スペイン、バルセロナを中心に様々な研究がなされてきた。その一連のガウディ研究は王立ガウディ講座 (Real Càtedra Gaudí) に集約されており、申請者は留学時に同講座の世界におけるガウディ研究ならびに関連資料を渉猟した。その膨大な研究体系において、建築家ガウディの思想的系譜に関する研究については等閑に付され、未着手の研究テーマであることを発見し、ガウディ研究の嚆矢である J・F・ラフルス著『ガウディ』(1929) に記された「ガウディは、ミラの美学における弟子であった Gaudí era en estètica discipulo de Milà」という叙述を研究の端緒とした。このガウディの思想の系譜を示唆する一文はガウディ研究において唯一のものであり、それゆえ、そこに端を発して、これまで顧みられることのなかったミラについて穿鑿を進める中で、美学者であるマヌエル・ミラ・イ・フンタナルス (Manuel Milà y Fontanals, 1818-1884) と美学者パウ・ミラ・イ・フンタナルス (Pau Milà y Fontanals, 1810-1883) 兄弟の存在が明らかになった。さらに、ミラ兄弟の思想や交友関係からガウディのバルセロナ建築高等技術学校 (現バルセロナ建築大学) 時の総長及び教授であったアリアス・ルジェン (Elies Rogent i Amat, 1821-1897) の思想へと敷衍することで、これら三者の思想的連関を究明することの妥当性を得た。ゆえに、こうした既往研究の欠如と論究の枠組みを踏まえた上で、本論文の目的は、当時カタルーニャにおいて普及していた思想的系譜と、ガウディの建築論的言説との関係性を浮き彫りにすることとした。カタルーニャの思想的系譜にガウディの建築論的言説を位置づけようと試みたは、既往の研究とは峻別されるべきテーマである。本論文は難解な西語美学文献を邦訳、精読する作業を通じて行った。

本論文は、序論、本論 4 章、結論の構成をとる。

序論においては、本論文の研究背景、ガウディ論の系譜における新たな道筋としての本研究の位置づけ、目的、方法・構成を述べる。

本論第一章では、ラフルスが記したガウディの思想的系譜を示唆するこの一文の信憑性を究明すること、ならびに既往のガウディ研究者におけるこの一文に対する視座の異同を明らかにすることで、本研究の重要性を示した。前者において、ラフルスの手書きの下書き原稿と、オリジナルのタイプライター原稿という二種類の一次資料を王立ガウディ講座の散在する資料保管庫の中に見出し、ラフルスの一貫した記述の姿勢から、その信憑性を確認した。また、ガウディ研究の碩学バルセロナ建築大学教授 J・バセゴダからも、彼がラフルスより「ガウディから

そう聞いた」という証言を確認していることも典拠とした。後者においては、この命題についてガウディ論の系譜を分析し、二人のミラの存在について言及しながら、本命題の重要性がぞんざいに扱われている問題を浮き彫りにし、本研究の意義を明らかにした。

本論第二章では、マヌエル・ミラとガウディの建築的思想の関係について考察した。第一節で本章の展望を述べ、第二節でマヌエル・ミラの人となりについて、第三節で彼の美学史上の位置づけを確認した上で、第四節以降で、ガウディの『日記装飾論』ならびに晩年の言葉をマヌエル・ミラの美学書『美学の原理、あるいは美の理論』(1857)を用いながら比較考察し、最終的には、ガウディの建築に関する諸思想がマヌエル・ミラのそれに多くを負っていたことを明示した。具体的には、美について、対象の性格について、建築の定義について、生命ある造形的ヴィジョン、自然の諸形象についての五つの概念に整理して考察した。例えば、美についての考察では、「主題は、物体、面、線、それら全てを組み合わせた形態を、“幾何学的”に表現することもでき、それらの対比から、美の主要な特徴の一つである“比例 *Proporción*”が生み出される」とガウディは述べているところを、マヌエル・ミラも対象の輪郭には数学的原理に基づいた関係性があり、「その関係のことを比例 *proporción* (シユムメトリア *symmetria*) と私達は呼び、より正確にいうならば対象物の部分同士の関係における幾何学比と呼ぶべき」とするように、両者の美についての概念が一致することを抉り出した。性格に関しては、その対概念である表現において、ガウディは調和のとれた構成の美しいギリシアのパルテノン神殿と、余計な蛇腹等も付したために、「表現過剰となってしまう、美とは正反対なもの」となったパリのオペラ座の比較考察を試みているが、マヌエルの「外面における卓越性 (=美)」は、過剰なもの = 余分なものが付加されることで美を壊してしまうとする原理と通底していることを示した。建築の定義については、第一に形態の問題があり、第二に材料の問題があり、第三に彫刻もしくは装飾を付す必要性があるとする建築に対する考え方の共通性を示唆するとともに、その論述の過程を通して、マヌエル・ミラが建築に自然の諸対象を取り入れて芸術的形態を目指す必要性があると説いている点に着目し、ガウディが述べる「自然の諸対象」は生命ある「総合的形態」であり、そこから建築は生命ある造形的ヴィジョンをもたなければならないとする晩年における創作態度へと純化していく道筋を摘出した。生命ある造形的ヴィジョンに関連して、「賢慮は科学より優れている。その名前は《*sapére*》、つまり味わう、玩味するという意味に由来する。賢慮は総合であり、科学は分析である。分析による総合は賢慮の総合ではない。それは分析的なものの一つにすぎず、全体ではない。賢慮は総合であり、生命あるものである」と、ガウディは晩年に述べているが、マヌエル・ミラが記した「解剖し、分析し、抽象化する理解力は、生命あるもの、総合であるもの、具体的なものを探し求める美とは正反対なもの」とであるとする考え方が類似して

いることから、ガウディはマヌエル・ミラの美学を踏襲していたことを示すことができたと考えている。『日記装飾論』ではこの相反する考え方が個別に記されているのに対し、晩年においては統合化された概念である「賢慮」として把握されていることから、このことはガウディがマヌエル・ミラの思想を晩年に向けて深化させた証であると考え、ガウディの諸言説の中におけるマヌエル・ミラの美学的概念の一層の重要性について提示することができたと考えている。

本論第三章では、第一節展望を述べ、第二節でパウ・ミラの人となりについて整理し、第三節で彼の美学的位置づけを確認した。第四節以降でガウディの言説をパウの美学書『直観の美学』（1904）や彼が講義で使用していた一次資料（パウ・ミラ自身によるスケッチ）を用いながら、両者の思想における比較考察を行った。その結果、ガウディの言説の中で、パウ・ミラの思想との連関が散見されるのは、主としてガウディの晩年期であることに着眼し、そのことからガウディの建築論的言説は、マヌエル・ミラとパウ・ミラのそれぞれの思想に共通しているものがあると認めながらも、ガウディの思想形成において影響を与えたのは、主としてマヌエル・ミラであり、J・F・ラフルスが記述した「ミラ」はマヌエルであったと結論づけた。

本論第四章では、第一節で本章の展望を述べ、第二節で建築家アリアス・ルジェンの人となりを示し、第三節で彼の芸術論・建築論を概説し、第四節以降にガウディの建築論的思想との関係について考察した。ガウディが創作において非常に重要であると語っていた建築と彫像の関係および、彫像の距離と視点の関係についてなどの建築の装飾に関する普遍的な主題が、アリアス・ルジェンの講義録の中に散見されることを突き止めた。また、ルジェン研究者のバルセロナ建築大学教授ペーレ・エレウが、ルジェンの思想は、マヌエルの思想的系譜に位置づけられるとする知見に依拠し、ルジェンの思想的背景には、マヌエル・ミラの諸概念があることを俎上させて、バルセロナ建築高等技術学校時のルジェンによる同講義の意義を提示し、それにより、ガウディの建築論的言説は、これら三者の思想とそれぞれに関係を持っていることから、ガウディの建築論的言説は、カタルーニャの思想的系譜の中に位置づけることができると考える。

結論では、上記の研究成果と、各章の考察結果の要約をもって本論文全体のまとめとしている。

以上により、本論文はアントニ・ガウディ・イ・クルネットの建築論的言説が、カタルーニャにおいて普及していたマヌエル・ミラを中心としてパウ・ミラとアリアス・ルジェンを包含した思想的系譜に位置づけられるということを明らかにできたと考える。

早稲田大学 博士（建築学） 学位申請 研究業績書

氏名 山村 健 印

(2011 年 11 月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
○ 論文	「建築家アントニ・ガウディと美学者ミラ・イ・フンタナルス兄弟の関係について」山村健、入江正之、日本建築学会計画系論文集 75(651), 1287-1292, 2010.05
○ 論文	建築家アントニ・ガウディと美学者マヌエル・ミラの諸思想の関係について、日本建築学会計画系論文集 77(672), 2012 年 02 月号、山村健、入江正之
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について(5) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.811-812,2011.09、山村健、入江正之
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの建築観について(2) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.813-814,2011.09、山村健、入江正之
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について(4) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.801-802,2010.09、山村健、入江正之
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの建築観について(1) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.799-780,2010.09、入江正之、山村健
講演	「建築家アントニ・ガウディと建築家アリアス・ルジェンにおける建築論の相異に関する研究 アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.813-814, 2011.09、渡部悠、山村健、入江正之
講演	「J・マタマラにみるサグラダ・ファミリア聖堂における典礼に関する諸作品について(1) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会北海道支部研究報告論文集、pp.435-438、山村健、入江正之
講演	「A.ガウディと J.ラスキンとの思想的重なりについて(1) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会北海道支部研究報告論文集、pp.439-442、2009、富田理恵子、山村健、入江正之
講演	「スペイン・カタルーニャの伝統的民家マジアに関する空間論的研究 「用」からみる空間の連続的変容と多様性について」、日本建築学会北海道支部研究報告論文集、pp.443-446、矢澤憲丈、傳寶知晃、山村健、入江正之、
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について(3) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概集 F-2、pp.557-558,2009.09、山村健、入江正之
講演	「美学者ミラ・イ・フンタナルスの思想について(2) アントニ・ガウディ・イ・コルネット研究」、日本建築学会大会学術講演会梗概 F-2、pp.559-560, 2008.09、山村健、入江正之
作品	「こだま幼稚園子育て支援センター」、入江正之+入江高世+早稲田大学建築学科(担当)、新建築、2011 年 6 月号
作品	「上州富岡駅舎設計提案競技」、2011年6月、出品
作品	「共愛学園前橋国際大学4号館 設計プロポーザル」、2010年6月、出品 (以上)